

「人類社会の進化史的基盤研究(4)」 2016年度第1回(通算第4回)研究会

日時:2016年7月30日(土)13:00-19:00および7月31日(日)9:00-15:00

場所:京都大学清風荘本館第2会合室

報告者:

1. 春日直樹 (AA研共同研究員・一橋大学)
2. デイビッド・スプレイグ (AA研共同研究員・農業・食品産業技術総合研究機構)
3. 田中雅一 (AA研共同研究員・京都大学)
4. 北村光二 (AA研共同研究員・岡山大学名誉教授)

内容(要旨)

1. 家族と縁組みについての幾らかの考察(春日直樹)

本発表が親族に焦点を当てる意義は、以下の2点にある。

- (1)人類学の歴史において、人類の進化は親族の形態という観点から論じられてきた。
- (2)人類の「生存」「極限状況」に密接にかかわるテーマ____食糧確保・身体の防衛・生殖・社会化など____は、親族の働きをぬきにして語るができない。

1. まずは、人類学における本研究の位置づけをおこなう。人類学の主要トピックであった親族は、分析と記述のための主要概念が E. Leach や R. Needham によって次々に批判された1970年代以降、かつての勢いを失った。けれども90年代になると、考古学や霊長類学や認知諸科学の研究成果に突き動かされるかたちで、人類学者によるあたらしいタイプの親族研究が散見されるに至る。本発表はその動きと無縁でないが、あくまで従来の人類学を前提にしながら、二つの問題を設定する。

一つ目は家族の再評価であり、もう一つはジェンダーと贈与の節合の検討である。前者についていえば、従来の親族理論が「血族性と姻戚性」(consanguinity and affinity)を主軸として築かれており、核家族のような限定的モデルが軽視される傾向にあった点を背景として上げることができる。パプアニューギニアとマッサム地域の民族誌を読むかぎり、外婚的な出自集団は、一つの夫婦とその子どもを主要な成員とする家族を必ず併存させている。したがって、出自集団にとっての核家族の存在意義を明らかにする必要がある。後者については、M. Strathern の *The Gender of the Gift*(1988)を参照せざるをえない。80年代以降、親族研究にとってかわったジェンダー研究に対し、人類学から大きな影響を与えた書物であり、核家族と出自集団に対しても深い洞察を得ることができるだろう。

これら二つの問題を、次のように言い換えてみよう。

- (1) 親族が血族と姻族を主軸にして成り立ち、二つの異なる血族集団間の女性のやりとりに注目するものだとしても、なぜそれによって一組のあたらしい夫婦とその家族をつくる必要があるのだろうか？ 初期人類にプロト家族がすでに現れていたにせよ、集団間の縁組が進化する過程で、なお家族が生き残る必然はどこにあったのか？
- (2) 血族集団の内部に、また家族の内側にジェンダーは存在するが、贈与と結びつくことは基本的にはない。この二つは、ある集団が女性を外部の他の集団へと抛出するときに、婚資をはじめとする財の交換が集団間に生まれることによって、はじめて結びつくのである。贈与の原理が血族や家族にあっては支配的にならず、縁組と姻戚関係の創造において求められるということ、どのように理解すればよいのか？

2. Strathern がメラネシアにおける社会性として提起した二つの概念から出発して、考察を進めたい。same-sex state および cross-sex state という概念である。両者の内容は、およそ以下の対比によって示すことができる。

<u>same-sex state</u>	<u>cross-sex state</u>
same-sex gender relations	cross-sex gender relations
political domain	domestic domain
mediated exchange	unmediated exchange
collective relations	particular relations
composite plurality	dual plurality

メラネシア人の社会生活は家庭の領域での cross-sex state でないかぎり、家庭の外部における same-sex state となり、そこでは男か女かのどちらかにジェンダー化された集合性を形成する。Strathern は両方の状況について、「人々は二つの実践を互いの隠喩になるように借用するので、実際には一つの実践がもう一つの形態の一部になっている」[1988:267]、と論じている。彼女は贈与儀礼のように特別な文脈において、same-sex state が cross-sex state へと類比されて現れることを強調する。より具体的には、次のように解釈できるだろう。贈与儀礼の成功に向けて、一つの出自集団が一つの家族のように協力しあうのである。男と女という二つの性別集団は、同一事業を営む夫婦のように無媒介的な交換、つまりは交換と呼べないほどの直接的なやりとりをつうじて、財を調達し儀礼の場を用意するわけである。このように cross-sex state が 隠喩化したかたちで same-sex state に現れることは、一つの出自集団で生じるにしても、二つの別々の集団どうしに起こると思えない。というのも、このとき二つの集団は贈与の関係で結ばれるのであり、贈与の関係は家族という cross-sex state にふさわしい原理ではないからである。そこで問題は、次の二つへと展開できる。

- (1) cross-sex state が same-sex state の内側へ隠喩として持ち込まれる状況についてわかるが、Strathern の指摘するように隠喩が相互に起こるとすれば、same-sex state が cross-sex state の内側へ隠喩化されるという逆の状況についても、明らかにする必要がある。これを明らかにできるならば、出自集団と家族は互いを必要としあい、親族の発達が家族を消さなかったことについても納得ができるだろう。
- (2) ジェンダーの関係と贈与の原理の結びつきは、same-sex state と cross-sex state の相互に隠喩的な関係とどのようにつなげることが可能なのか。このつながりがわかれば、ジェンダーと贈与の必然的な関係を理解できるのではないか。

3. 発表ではまず、後者の検討をおこなった。結論として、ジェンダーの領域と贈与の領域との間でも、相互的な隠喩の関係が生じていることを提起した。つまりは、縁組と贈与儀礼をともにおこなう二つの集団において、「人々は二つの実践を互いの隠喩になるように借用するので、実際には一つの実践がもう一つの形態の一部になっている」という状況を提示したのである。

縁組の出発点では、女を与える／受け取るという性に関する非対称性が現れる。この非対称性への対処は、別の非対称性との類比をつうじておこなわれるのではないか。つまりは財の非対称性であり、贈与(代償)というかたちをとる、と考えることができる。ただし、類比は類比にすぎないので、ジェンダーと贈与は決して等価にはならないし、縁組で生じるジェンダーの非対称性が贈与によって対称性を回復することはない。女性の受け手(=夫方集団)は女性の与え手(=妻方集団)に対して、その非対称性を財の非対称性へと喩えてみせるだけである[父系制においてはこの非対称性に加えて、結婚で生まれる子どもの帰属についての非対称性が、さらに加わることになる]。

M.Godelier は *The Making of Great Men*(1988)において、パプアニューギニア東高地の諸社会で実施される姉妹の交換婚を西高地での婚資と対比し、東高地では女性は女性とのみ等価なのだから、交換婚はモノの非対称性を導出しない、と論じている。しかしながら、東高地のさまざまな民族誌は、交換婚といえども受け手から与え手への贈与が絶えずおこなわれていることを報告する。交換婚は二つの結婚で構成されており、それぞれの結婚においてジェンダーと財との非対称性が生まれるのである。

このように考えると、ジェンダー関係と贈与____つまり財の非対称なやり取り____は、女性を外に出すときにはじめて結びつくことがわかる。つまり縁組によって、二つの非対称な関係が互いを参照し合うようになるのであり、結婚と贈与が不可分の結びつきを形成するわけである。

本発表は最後に（１）の問題の考察を、家族の詳細な記述を含む民族誌的な一事例に依拠して展開した。G.Herdtによる*Guardians of the Flutes*(1981)および*The Sambia*(1986)は、母親や姉妹から引き離されて男子になるための過酷な成人式を何段階にわたり経験する過程を濃密に描き出すと同時に、妻との関係、母親との関係についても適度に目配りをしている。Sambia社会はcross-sex stateをことのほか抑圧する事例を提供しており、加えてsame-sex stateは出自集団を越えた地域の水準で強力に構築されている。しかしながらこうした例外的な状況にあっても、same-sex stateとcross-sex stateが相互に隠喩化される諸局面が明らかに認められるのであり、親族の進化が家族を消さなかったことについて、その受け入れを許すのである。

2. 死亡率：生活史としての理解と生態学としての理解（デイビッド・スプレイグ）

1. 背景

人類進化の長い道筋を顧みて、ヒトの生活は持続可能(Sustainable)と考えてよいのだろうか。当然、現在までヒトは生存してきたことを見れば、ヒトの生活が持続していることは間違えないが、持続が保証されていたわけではなかったであろう。また、どのような生き物として生き延びてきたかを解明することは生態人類学の基本的な課題の一つである。

持続性を評価する上で最も基本的な要因の一つが死亡率といえる。持続することはすなわち生存することであり、生存を遮る死亡は生物界における基本現象であるとともに、その率は生物学理論の重要な説明要因でもある。進化論においては、自然選択の原動力であり、生態学では個体群の数の主要な決定要因である。近年の生物学では生き物の繁殖戦略が注目されがちなような気がするが、その対である死亡率について理論を整理しておく必要があると考えられる。死は、誕生とともに、生物がかならず経験する。繁殖は必ずしも全個体が経験するわけではない。むしろ殆どの生物個体は繁殖を経験することはない。何故ならば、繁殖の機会を得る前に死んでしまうからである。よって、繁殖戦略とともに、あるいはそれ以前に、死亡率を考慮して生物の進化と生態を評価する必要がある。

2. 生態学と生活史理論における死亡率

一言で死亡率と言っても、生物学を構成する様々な理論のなかでその意味が一定ではないことに注意しなければならない。生物種の持続性を評価する理論体系は大きく分けて生活史と生態学の視点、またはその組み合わせである。そこで、生活史と生態学の論旨のな

かで果たす死亡率を整理しておく。

1) 生態学 (Ecology)

研究対象：生物の数と分布を説明しようとする研究分野。

研究する現象：研究対象となる現象は個体群の数と分布の変動と、それを引き起こす環境要因。

生態学における生活史の役割：生活史は前提条件として個体群変動モデル内で考慮するが、個体群変動によって生物の進化が伴う必要はない。

死亡率の役割：個体群変動の主要な要因であり、死亡率が高いと数が減少したり、分布が狭められたり、消滅したりする。

2) 生活史 (Life history)

研究対象：生物の生涯にわたる成長と繁殖の戦略を説明しようとする研究分野。

研究する現象：生涯の過程上の生活イベント（成長、成熟、繁殖、老化など）の連鎖とそのタイミング（順番や間隔）。

生活史理論における生態学の役割：生態学は生活史を説明する外部要因として扱われる場合が多く、生物の生活を左右する気候、生息地（森林・草地）、捕食者、環境の安定・不安定などが生活史の説明要因として扱われる。

死亡率の役割：生涯にわたる死亡率の「予定」は他の生活イベントの予定、特に繁殖の予定に影響する。生き物としての課題は死んでしまう前に子孫を残すこと。例えば、早死にする生物は早く繁殖し、長生きする生物は繰り返し繁殖する機会を得る。

生態と生活史は互いに外部要因・決定要因・前提要因として扱われる場合もあるが、知らぬ間に融合していることもあるので要注意： r/K selection。

3. ヒトはK戦略か、r戦略か？

生活史と生態を組み合わせた理論が r/K 理論である。死亡率が低く、長生きして少数の子供を大事に育てる動物は生息地の生態的許容量 (Carrying capacity, K) まで個体群を増やして、巧妙な生存戦略をもって安定的に生活する。逆に、死亡率が高く、寿命の短い動物は旺盛な繁殖力 (Reproductive rate, r) と拡散力をもって生息環境の変動を乗り切る。生活史として、ヒトは、哺乳動物のなかでは大柄で、生存率も高く、子供が少ないので、通常は K 戦略の動物とされている。

ところが、そこで、K 周辺まで増加した個体数を制御するはずの「密度効果」が問題になる。ヒトの人口を制御する密度効果のメカニズムは何なのか？ 黙示録の四騎士なのか？： 悪疫 (pestilence)、戦争 (war)、飢饉 (famine)、死 (death)。このように考えると、K 周辺の生活の実態は厳しく、生態学でいう死亡率は必ずしも低いとはいえない可能性がある。K 周辺の生活の例に近世の日本をあげられる。近世の日本は巧妙な農林業戦略によって繁栄したともいえるが、同時に何度も大飢饉を体験し、近世後期はむしろ人口を減少させている。すなわち、持続可能な社会生態はある意味で全体として豊かでありながら、あらゆる密度効果のために生き物の実感としては厳しい生活かもしれない。

しかし、視点を変えるとヒトの生活史には r 戦略の側面もあると考えられる。まず、大型類人猿としては、ヒトの生存率のみならず繁殖率もかなり高い。ヒトは他の類人猿にはない「子供期」を生活史に組み込み、子供を早めに離乳させ、共同で子育てしながら、繰り返し出産することにより、繁殖力を向上させてきた。さらに、約 20 万年ものあいだ、南部アフリカから出発した人類は新天地を求めて全世界へと生息地を急拡大させ、人口は増加し続けてきた。また、度重なる飢饉や疫病による人口減少を乗り切ってきた。この見方では、ヒトは強烈な r 戦略生物ともいえる。しかし、究極的には r 戦略は持続しにくいという前提が r 戦略理論に潜んでいる。r 戦略生物の運命は、自らがもたらす環境変化や密度効果により、増加路線の限界にぶつかる。そこで、新天地を求めてさらに拡散するか、K 戦略へと移行せざるを得ない。

4. 総括

- 生活の持続に失敗すれば死んでしまう。コミュにティーが縮小したり消滅したりする。ただし、高い死亡率が継続されると生活史が進化する可能性もある。
- K 近くの生活は厳しい。生息環境が「豊か」であっても、密度効果のために生物の実感 は厳しい。「持続的」な社会は非常に厳しい社会かもしれない。
- r 戦略はとりあえず生物の実感としては豊かな生活かもしれない。けれど時限付き。
- 個体群が成長し続けるには新天地を求めるか、何らかの技術革新（ヒトの場合は道具 使用や生業の発展）で K を上げなければならない。
- ヒトは r / K 戦略を使い分けてきたのではないか。技術と組織で生存率・繁殖率を高く 維持してきた。ただし、生活史の進化はなぜか主に出産間隔を縮めることで対応？ 離 乳食という技術？
- 現代の少子化は貨幣経済を媒介とした密度効果の表れ？

3. ホロコーストの生存者たちとともに生きる人びと：アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所のガイドたち（田中雅一）

死者だけでなく、多くの生存者 *survivor* や犠牲者 *victim* を生み出す災害や戦争の記憶をいかに継承すべきなのか。生存者らの悲痛な経験をいかに共有できるのか。こうした問題意識は、災害や戦争に関わってきた歴史家や医療関係者、司法関係者、芸術家、さらにわたしたち文化人類学者に共通して認められる。本発表では、災害地や戦場など、いわゆる人類の負の遺産を案内するガイドを取り上げて、その性格を考えてみたい。具体的には、2015年に170万人が訪れたポーランド・アウシュヴィッツで働くガイドたちを取り上げる。

ガイドたちは、訪問者が集中する夏には毎日2回アウシュヴィッツ博物館に展示されている遺品を訪問者たちに紹介している。遺品の中にはユダヤ人たちが残したスーツケースやおびただしい数の靴、義足などが含まれている。また、髪の毛で編まれた絨毯も展示されている。仕事とはいえ、こうした遺品に毎日対面するには、かなりの精神力が必要である。

心身への影響を恐れ、展示品にあまりにも無関心になろうとすると、訪問者への説明が機械的になってアウシュヴィッツのできごとを十分に伝えることができない。これは、程度の差はあれ、アウシュヴィッツに限らず、広島や長崎、沖縄戦のガイドにも当てはまるであろう。つまり、負の遺産のガイドは複雑な「感情労働」に従事していると考えられる。ここで言う感情労働とは、社会学者ホックシールドが『管理される心』（1983年）に提案した概念で、「自身の感情表現を管理し〔たとえば微笑みを絶やさず、配慮の行き届いたしぐさ〕、サービスを受ける客に肯定的な感情〔安心感〕を生みだしたり、否定的な感情〔不安や恐怖〕を軽減したりする一連の行為」を意味する。日本では、主として介護や看護、保育の分野で研究がなされてきたが、ツーリスト・ガイドについての研究は皆無である。

本発表では、以上のような問題意識を念頭に、4人の女性ガイドと1人の男性ガイドの声を紹介する。ガイドたちは、アウシュヴィッツには負のエネルギーや負の感情が認められると述べる。また、展示品自体もしばしば恐怖を引き起こす。一人のガイドは、始めて2年間は陳列ケースに展示されている女性の髪を直視できなかつたと語っている。このような展示の延長に生存者の存在を位置づけることも可能である。展示品は、いつも同じところに同じものが同じ状態で展示されている。このため、最初は衝撃的であっても、すこしずつ慣れてくる。しかし、生存者は違う。いつどんな生存者に会うのか予想がつかないし、どんなことを話し始めるのかも分からない。あるガイドは、ホロコーストとある程度距離をとって接していたが生存者と接すると、そのような距離が攪乱し、自分の生活に入ってくる。そして、気分が悪くなったり、夢に生存者が現れたりするという。もちろん、生存者に接することで、ガイドの語りはより豊かになり真正性を増す。この真正性がないと、

ガイドの語りから過去のできごとへの想像力が働かない。しかし、否定的な側面も無視できない。

訪問者との関係では、ガイドは感情を込めて案内する必要がある。そうでないと本物として受け止められない。しかし、自分の感情を前面に出しすぎると、ガイドが中心になってしまう。ガイドは俳優ではない。あくまで媒介者でなければならない。このため、あるガイドは、感情を抑え、説明をすることに徹する。これら二つは、感情についての対立する態度と言える。まったく感情を配すると嘘っぽくなり、反対に感情を出しすぎると過去のできごとが背景に退いてしまう。なんらかのバランスが必要である。

アウシュヴィッツで感じる悪い感情を克服するために、ガイドたちはさまざまな工夫をこらしている。博物館にはガイドの精神衛生を扱う専門家はいない。このため、ガイドたちは親しい同僚と話し合う機会を設けたり、家庭と仕事をできるだけ分離するなどして、対処している。気晴らしにどこかに行ったり、ホロコーストと関係のない読書に熱中したりする。しかし、耐えられずに競争率の高いガイドの道を諦める人もいる。

ガイドたちは、おおよそ仕事に深くコミットしていて、勉強熱心である。Mission と passion が不可欠だと述べる。あるガイドは、その仕事を（生徒が毎日変わる）教師の役割にたとえている。

すでに指摘したように、感情の統御が重要であることが明らかになった。これは、冒頭で示唆したようにアウシュヴィッツに限らず、負の遺産のガイド一般に言えることであろう。言い換えると、日本では福島などをダーク・ツーリズムの拠点にすることで、経済的な復興を目指そうという動きがあるが、これを実現するためには、ガイドをはじめとする関係者の「心のケア」を無視すべきではない。

本発表では、ほかにイスラエルからの訪問者、ドイツからの訪問者に対するガイドの態度、接する際に気をつけなければならないこと、アウシュヴィッツにおける「カトリック化」をめぐる問題などに触れた。

4. 相互行為システムによる二重の層位での選択—「地域社会の消滅」という課題に向き合うときに見えてくるもの—（北村光二）

1. はじめに

この報告では、相互行為システムのコミュニケーションが卓越するような社会におけるコミュニケーション現象がどのような特徴をもつものであるかを検討する。ここでいう「相互行為システムのコミュニケーション」とは、個々人が自律的に外界との直接的な関係を

作り出そうとすることを前提に行う仲間とのコミュニケーションであり、基本的には、参与する人々が同じ場所に居合わせて相互に知覚し合うことで可能になっているのである。そしてそれは、あらかじめ存在する役割関係や権利・義務関係を用いて集団的意思決定を行い、それにもとづく集団的問題対処を行う「組織システムのコミュニケーション」とは明確に区別できるものである。さらに、それは、参加者の一方が拒否するだけで存在することをやめてしまう状況システムでもあるという点も重要である。

以下での考察の出発点は、私が 1986 年以来調査を継続してきた北ケニア牧畜民トゥルカナで見出され、私が「強要的な物乞い」と名付けた相互行為である。そのコミュニケーション現象をどう理解したらよいかについて考察を進めながら、それをより高い抽象度の用語によって記述することによって、この現象がトゥルカナに特別な、ないしは、制度や権威構造が未発達な原初的な社会に特別なものではないことを明らかにし、これに類似のより多様な現象を理解可能にする理論的枠組みについての新たな提案を行いたい。そして最後に、この枠組みを用いて、現代日本が抱える「地域社会の消滅」という問題にもアプローチする。

2. トウルカナに特徴的なコミュニケーションのあり方をどう理解するか

私は、長年にわたるトゥルカナとの付き合いの中で、近代に生きる私たちにとって強烈な印象を刻むものとなる「強要的な物乞い」という相互行為について、トゥルカナ自身がそれをどのようなコミュニケーションとして体験しているのかを明らかにしようと悪戦苦闘してきた。彼らは、さまざまな場面を捉えて相手に「もの」を与えるように要求するのだが、相手も要求されるごとに与えることなどできないわけで、それを断ろうとすることでそこに交渉的な相互行為が繰り返されることになる。この相互行為についての理解を困難にしているものとは、第一に、物を乞うて相手が拒否したとしても乞う側がその獲得をあきらめないために、ないしは、乞われる側が拒否してもそのやりとりを打ち切ることができないために、その要求と拒否というやりとりが終わりのないもののようにいつまでも続くという点であり、第二には、交渉の当事者として、このような膠着状態の先にどのような決着の可能性があり得ると想定しているのかが理解不能だという点である。

ここでトゥルカナが何をしているのかについてのとりあえずの理解は以下のようになる。まず、双方の当事者があくまでも各自の利益を確保しようとすることによって膠着状態に至ることになるが、そのまま当事者間の交渉を継続するというやり方を貫くことによってそのような事態に何とか対処しようとしているのだが、同時に、あくまでも当事者たちが一致して妥当だと判断することになる対処法を選択しようともしているのである。そのうえで、ここで対処法として何を選択することになるのかはそのときの相互行為の行きが

りに委ねられることになるのであるが、この点も私たちの理解を難しくしているこのやり方に特徴的な部分である。

そのような振舞い方を支えている彼らの基本的な選択とは以下のようなものだと考えられる。まず、彼らは、そのときの相互行為によって直面する課題に関わる何らかの結果を実現しようとするとともに、個々の相互行為を超え出るより大きな地域社会の秩序に関わる選択として、仲間との共存を再生産可能なものとして維持しようともしているのだと考えなければならない。その際、それぞれの当事者はその選択を、自分自身の選択としても経験しながら、そのときの相互行為の相手とともにする「われわれの選択」としても経験しているのである。そしてこのようなより大きな地域社会に関わる選択は、現代日本に生きる私たちにはごく特別なものに見えるのであり、私たちは私的な領域における選択の自由を手にした一方で、より大きな社会の秩序に関わる選択に仲間とともに当事者として直接関与するという経験を喪失してしまったかのようなのである。

しかし、そのような感慨は人類学者が陥りがちなノスタルジアに過ぎないともいえるはずであり、彼らがしていることをごく特別なこととして祭り上げてしまうことなく、人間であれば誰もが当たり前に行っているはずのことの一表現型として理解する道を探さなければならないはずである。そのような考え方を手にすることによって、民族誌的研究にもとづく新たな人間理解の可能性が切り開かれるはずであるのだから。

2. 新しい理解

なぜ、彼らのやり方が特別なものに見えるのかを考えるとところから始めよう。まず、彼らが徹底的に個人の利益の確保にこだわりながら、同時に仲間との協働によって、仲間と共有される対処法を選択しようとしているという点が重要である。そして、最終的に何らかの決着がもたらされたときには、たんなる個人の選択にすぎなかったはずものが、仲間との協働による「われわれの選択」になっていると考えられるのである。

その選択は、何らかの個別的な結果を志向するものであるとともに、その選択の前提となる人びとが暮らす地域社会の秩序の再生産を志向するものでもあるという、二重の層位にわたる選択になっているのである。そして、このような性質を持つ選択は、近代に生きる私たちには全くなじみのないものだということではない。私たちの場合は、例えば、直面する問題に仲間と協働して対処しようとして、人びとが共有する規則に従った行為選択を行うというときにしていることなのである。それは、個別的な問題対処を志向するものであると同時に、社会の秩序維持を志向するものでもあるのだから。ただしこの場合は、問題への対処法として何が選択されることになるかは規則によってあらかじめ指定されているのに対して、彼らのやり方では、それが何になるかはそのときの相互行為の行きがかり

に委ねられているのである。

規則に従った仲間との協働による問題対処の場合を参照すれば明らかなように、このような選択は、決して、個人の、すなわち、意識システムの選択ではなく、それとは明確に区別できる社会システムの選択である。そして、トゥルカナの場合には、「相互行為システムの選択」を問題にしなければならない。さらに、その選択はそのときの相互行為の行きがかりに委ねられているという意味で、相互行為システムの主体的な選択だと考えられなければならない。個人がする主体的な選択とは、そのときの具体的レベルでの選択に先立って、その前提となる可能な選択肢集合の全体を選択した上でなされるのであり、それは二重の層位での選択ということになる。選択肢として他なる可能性があることを知ったうえで、あえてその他なる可能性を実現しなかったことによって生起しているものという意味で、この場合は相互行為システムの主体的な選択だということになる。

3. オートポイエーシスを確実にするメタレベルの選択

ここで問題にしている相互行為システムがする二重の層位での選択とは、直面する問題への対処のためにする具体的レベルの選択において、その操作それ自体についての反省が求められるところで、その操作の前提となる、個々の相互行為を超え出る地域社会の秩序をある望ましいものとして確保しようとする選択が顕在化したものだと理解できる。そこで確保しようとしている秩序とは、基本的には、コミュニケーションの試みにコミュニケーションの試みが接続して相互行為が継続することをより容易にするような状態のことであり、コミュニケーションのオートポイエーシス（＝自己産出）を背後から支える状態のことである。具体的には、この相互行為システムのコミュニケーションにおいて、それぞれの当事者が、相手の自律的な選択を尊重して、たとえそれが自らの期待に反するものであってもコミュニケーションの接続を放棄せず、あくまでもそこに共通理解を見出そうとし続けるというやり方を採用することによって、コミュニケーションの接続を容易で望ましいものにするような相互行為の場がそこに確保されることになるのだと考えられるのである。そして、このときのより大きな社会の秩序に関わる選択とは、具体的レベルの選択に伴うメタレベルの選択という位置づけになるはずである。

私たちも、コミュニケーションの安定的再生産を確保しようとして、相手の意向に合わせて交渉をまとめようとするところがあるが、それは個々の相互行為を超え出る社会が選択してしまっている秩序のあり方（と当事者が考えているもの）に従属することにしかならない。それは当事者個人の主体的な選択ではないというだけではなく、そのときの相互行為システムの選択にさえなっていない。具体的には、例えば、当事者相互の利害が対立する問題への対処として私たちが採用するふつうのやり方とは、規則や制度のような社会が

選択した基準に従って、そのときの利害の対立を調停するような妥当なプランについての合意を形成しようとするというものである。そして、解決が難しい課題に仲間と協働して対処しようとするときに私たちが採用するふつうのやり方とは、そのときのコミュニケーションに先立って存在している「組織」を前提にした集団的意思決定によるものであり、その場合には組織のすべてのメンバーがその決定に従属せざるを得なくなるというものになる。これらのものは、同じ場所に居合わせてコミュニケーションしている人々の主体的な参与による相互行為システムの選択とは、明らかに別のものになる。

その一方で、集団的意思決定を容易にする「組織」を持たず、規則や制度のような社会という個々の相互行為を超え出るまとまりが用意する支えが未発達な、人間以前の社会や人間の原初的な社会では、相互行為システムにおける二重の選択という現象は、ごく一般的なものである。哺乳類の群居的な社会においては、それぞれの個体が一般的な行動傾向として、近くにいる同種個体と活動を同調させようとしながら可能な限りコンフリクトを回避しようとするというやり方を採用することで、そのような状態が繰り返し再生産されるという社会秩序が確保され、それによって同種個体間でのこの種の行為接続が、個別的な出来事として容易に選択できるようになっている。真猿類の群れ社会では、同じ群れのメンバーどうしという関係で活動の同調とコンフリクトの回避を行うことによって、群れというまとまりが維持されてコミュニケーションの安定的再生産を保証する秩序が成立し、その秩序のもとで同じ群れのメンバー間での様々なタイプの行為接続がより容易に選択できるようになっているのである。

チンパンジー属の社会では、同じ集団の他のメンバーと離れて暮らせるようになっているが、離れて暮らしていた個体間で同じ集団のメンバーどうしという関係にあることを確認する手段と機会が用意されていることから、それらを活用することによって同じ集団のメンバーどうしのコミュニケーションの安定的再生産を保証する秩序が成立しているのだと考えられる。さらに、相互行為システムのコミュニケーションが卓越する原初的な人間社会においても、例えば、狩猟採集民ブッシュマンの社会でも、トゥルカナ同様に、徹底的に個人の自律性を尊重し合うというやり方でコミュニケーションの安定的再生産を確保しようとするメタレベルの選択が、不可欠のものとして実行されている。

すでに述べたように、現代日本に生きる私たちにとっては、相互行為システムのコミュニケーションにおいて自らが当事者として、個々の相互行為を超え出るより大きな社会の秩序に関わる選択に直接関与するという経験は、ごく特別なものになってしまっているのだと思える。しかし、以下に示すような相互行為システムのコミュニケーションが重要な機能を果たしている地域社会においては、トゥルカナ社会において私が見出したものと類似の現象が成立しているのではないかと思える。具体的に検討してみよう。

4. 島社会における「島で暮らし続ける」という選択

現代日本では、生まれ育った島を出て本土で暮らすということが少しも特別な選択ではなくなっている。そのような状況では、そこで暮らし続けようとするのは、より積極的な選択として自ら肯定できるものにならなければならなくなっている。そして、「島で暮らし続ける」という選択とは、そのように選択した者にとっては、たんに個人として島から出ないというだけのことでなく、この島の地域社会をこれから先も存続し続けるものにしようとするという覚悟のもとでそうすることになるのだと考えられるのである。それは、「地域社会の消滅」という最悪の事態を起りうる未来として自覚したうえで、日々の問題対処のための相互行為を実行しながら、同時に、そのときの選択が個々の相互行為を超え出る地域的なコミュニケーションのまとまりの再生産をより容易にするものになっているかを繰り返し反省するようになるということである。

以下では、以前に私が調査した岡山県白石島の事例を手がかりに考察を進めよう。その研究では島社会が抱えるさまざまな問題を取り上げたが、ここでは地域の伝統芸能である「白石踊り」の継承の巡る問題に焦点を当てて検討する。

この白石踊りは、かつては島民のほとんどが踊れた地域の盆踊りであったが、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定され、近年は観光の目玉とも目されており、「白石島の誇り」として島民に意識されてもいる。しかし、過疎化による人口減少と、娯楽の多様化による島民の踊り離れもあって、島民のための盆踊りの輪は小規模化し、以前のような盛り上がりは期待すべくもないものになっている。このような状態はかなり以前から誰の目にも明らかなものになっており、伝統行事継承への危機感から、小中学校で子供たちに踊りを教えるという試みが20年以上も続けられている。また、お盆が近づく時期には、観光客向けに踊りの機会を設けたり、チャーター船を仕立てた鑑賞体験ツアーを企画して、一緒に踊りを体験できるようにレクチャーする機会を提供してもいる。

このような伝統行事継承のための活動は、「白石踊会」という島民の中でもとくに熱心な人たちによって担われているが、その活動に対する他の島民の反応は、予想外に懐疑的なものなのである。観光客向けの踊りでは、揃いの衣装で見栄えの良いものが披露されるとともに、踊りの最中に解説が挿入されて中断したりするが、それに対して「これでは誰のための白石踊りかわからない」という不満が述べられる。また、学校教育の場での踊りの指導に対しても、島民にとっての踊りのあるべき姿という観点から、「否応なく習うものになった」という否定的な評価が述べられたりもする。文化財指定という肩書に対してさえ、「文化財に指定されたから伝承しているのではない」という島の人びとの「自分たちの踊り」への誇りが述べられたりもするのである。

しかし、だからといって、外部からの高い評価や経済的効果それ自体を否定的に考えているわけではない。それらは、地元の年中行事として自分たちが大切にしてきたという思いと共に、継承の危機に際してそのあるべき姿を意識することを動機づける重要な要素になっているのである。外部からの要請にも応えながら、その行事のあるべき姿との間に折り合いをつけようと試行錯誤を繰り返してきているのである。このようなやり方で白石島の人びとが実現しようとしていることは、この行事を今後とも長期間にわたって維持することを可能にするような地域社会の秩序を確保することなのだと考えられる。この場合人びとは、この行事に対する個人的な好みの違いから誰もが同じように積極的に関与するとは限らないということを前提に、それぞれがそれぞれの立場でこの問題に取り組もうとしたときに、それを多くの島民が納得するものへとまとめ上げようとコミュニケーションを接続し続けることが不可欠となるが、それをより容易にするような秩序を確保しようとしているということなのである。

ここで白石島の人びとがしていることは、相互行為システムがする選択という操作それ自体について反省することによって、その前提となる、個々の相互行為を超え出る地域社会の秩序をある望ましいものとして確保しようとするそのものだと考えられる。

5. おわりに

地域的な広がり内部におけるコミュニケーションの接続をより容易なものとして確保しようとするメタレベルの選択とは、個人の自律的な選択と矛盾しない、共に暮らす仲間との協働による「われわれの選択」によって、すなわち、相互行為システムの主体的な選択によって自らの人生を切り開こうとする生き方にとって、必要不可欠なものになると考えられるのである。ただし、近代に生きる私たちの場合は、仲間との協働による集団的な問題対処において、外部的な権威や制度が指定するものに従属することで仲間との協働が可能になっていることがふつうなのである。その場合には、「相互行為システムの主体的な選択」が問題になることはなく、この種のメタレベルの選択に目が向けられることもない。

ここで注目したようなメタレベルの選択が顕在化することは、相互行為システムのコミュニケーションが当事者の一方が拒否するだけで存在することをやめてしまう状況システムであるという事実によって直接由来している。コミュニケーションの地域的まとまりを強化する制度的支えや権威構造を欠いている自然発生的な地域社会では、相互行為システムのコミュニケーションが卓越する一方で、そこでのコミュニケーションの接続が簡単に途絶しないようにしようとして、この種の選択が不可避的に顕在化するのだと考えられる。また、現代日本の島社会をはじめとする消滅可能性が取りざたされる地域社会では、従来からあった組織的・制度的支えの弱体化に伴い、相互行為システムのコミュニケーションの重要

性が無視できないものになるのであり、地域的な広がりにおけるこの種のコミュニケーションの接続を確保しようとする選択がより強調された形で顕在化することになるのだと考えられるはずである。